

で、唯わりのまゝを記し、感じたまゝを書き立て、以て其任を免れやうと思ふ。もとより、途邊の際、鉛筆を走らせたのであるから、冠を足につけるやうな事もないと云へない、その邊は記者の粗忽であるから、あらかじめ断つておく。全體の記事は別に作つたものでない、たゞ其報告をその儘、そつくりと、擔き出したものであるから讀者諸君、幸に之を諒させられよ。

◎大日本武德會第一回端艇競漕會

一、會場の模様、會場の有様は例年と格別の差なし先づ入口よりは大國旗を交叉し幾百の小旗は空高く舞ふて余等を迎ふる如きである、三保早頭の埠岸一帶には實張の小屋を造り其に白幕が覆ふてある其の一棟には正會員、特別會員、婦人、來賓、奏樂、行賞、審判、委員、新聞記者、演武者、出漕者の諸席に順次區畫せられ、湯飲席、抽籤席、服装席等各々別棟にあつた、前面には武德會支部、大津同窓會の會員席にあつたる二漁船、及審判漁

| | | | | |
|----------------------------------|-----------------|----|---|--------------|
| (赤) 同 縣大津同窓會撰手 | 富士 | 二 | 一 | 七分〇一 |
| (青) 京都關西芙蓉俱樂部第三撰手 | 新高 | 三 | 二 | |
| 第三回、九時十七分曳艇 | | | | 同四十分發漕 (風前同) |
| (白) 滋賀二中第一撰手 | 千島 | 一 | 二 | 六分三一 四〇 |
| (赤) 滋賀縣淡海俱樂部 | 富士 | 二 | 三 | 六分三九 |
| (青) 重慶縣立第一中學校洞津俱樂部 | 新高 | 三 | 一 | |
| 第四回、九時五十三分曳艇 | 千島 | 一 | 二 | 六分一五 三四 |
| (白) 京都同志社 | 新高 | 二 | 一 | 七分〇七 |
| 第五回、十時三十分曳艇 | 千島 | 一 | 二 | 六分一五 三四 |
| (赤) 大坂耶志摩俱樂部第一撰手 | 新高 | 二 | 一 | 七分〇七 |
| (白) 島根師範學校 | 新高 | 二 | 一 | 七分〇一 |
| (青) 滋賀縣立第一中學校 | 富士 | 三 | 二 | |
| (赤) 大坂天王寺中學校 | 富士 | 二 | 一 | 五分五八 |
| 第六回、十一時曳艇 | 同廿分發漕 | 千島 | 一 | 三 五分五三半四〇 |
| (白) 滋賀縣師範奉公團 | 千島 | 一 | 二 | 五分五七 四二 |
| (赤) 京都府第一中學校 | 富士 | 二 | 一 | |
| 此れ本日中最も目さましきもの、白は半艇身の勝を以て決勝線に入れり | | | | |
| 第七回、十一時半曳艇 | 同五十分發漕 | | | (風前同) |
| (青) 廣島縣立第一中學校 | 新高 | 一 | 三 | 六分〇二 二八 |
| (白) 島根縣立第一中學校 | 千島 | 二 | 一 | 六分三一 |
| (赤) 高知縣立第一中學校 | 富士 | 三 | 二 | |
| 第八回、○時五分曳艇 | 同廿五分發漕 (風稍追風なる) | | | |
| (赤) 滋賀縣立商業學校 | 富士 | 一 | 二 | 五分五二半四〇 |
| (青) 島根縣第二中學校 | 新高 | 二 | 一 | 五分五五 |

船なる二艘の小船、何れもはでやかに飾られて浮び、大津署の水上警備ボートも屢々見うけた、又正會員席等と道を隔てゝ竹馬會の賣店(主よ水店)があつて一入景氣づいた、扱、會場よりは大浦兼武木下大學總長の両副會長を始め、遠近諸學校團体の健兒は早くも參集し今や遅しと待つて居つた、かくて豫定刻は午前七時であつたが如何なる理由か遅れて八時四分に開始の轟砲が轟いた、

二、競漕、余等の位置は甚しく斜にして加ふるに競漕となるや各人われ能く見んとて頭部を出し爲に五六百メートルの所に來るに非ざれば見る能はず、而も余等の如き斯道に不熟なるもの漕調等の如何を論する能はず、此邊惟察を願ふ、

| 團 体 | 艇名 | 着順、位置、時間、ビット数 |
|----------------|--------|---------------|
| 第一回、八時十七分曳艇 | 同卅五分發漕 | (風少し) |
| (青) 岐阜縣立大垣中學校 | 富士 | 一 一 六分四八 四二 |
| (赤) 愛知縣第二中學校 | 新高 | 二 三 |
| (白) 德島縣立德島中學校 | 千島 | 三 二 |
| 第二回、八時四十五分曳艇 | 九時發漕 | |
| (白) 滋賀縣B S 俱樂部 | 千島 | 一 三 六分三八 四四 |

| | | | |
|--|-------|---|-----------|
| (白) 兵庫縣神戸商業學校 | 千島 | 三 | 三 |
| 第九回、〇時四十分曳艇 | 一時發漕 | | (風前同) |
| (青) 島根縣松江セーター俱樂部 | 新高 | 一 | 六分一九 三二 |
| (白) 大坂初音俱樂部 | 千島 | 二 | 六分三八 四〇 |
| (赤) 京都新高俱樂部 | 富士 | 三 | 三 |
| 第十回、一時十分曳艇 | 同卅分發漕 | | (風前同) |
| (赤) 滋賀縣大津同窓會撰手 | 富士 | 一 | 六分〇九半三二 |
| (白) 京都關西芙蓉俱樂部第一撰手 | 千島 | 二 | 三 六分三六 四二 |
| (青) 大坂耶志摩俱樂部第二撰手 | 新高 | 三 | 二 |
| 第十五回、一時四十分曳艇 | 二時發漕 | | (風前同) |
| (白) 滋賀二中第二撰手 | 千島 | 一 | 三 六分三二 三六 |
| (青) 滋賀金龜佛教中學校 | 新高 | 二 | 一 |
| (赤) 船俱樂部 | 富士 | 三 | 二 |
| 右終りて三十分の休息となつた、 | | | |
| 其間に審判委員會議を開かれて、慰め競漕には京都一中、鳥根一中、名譽競漕には嶋根師範、本縣商業及師範擬定され、競漕前に木下副會長は名譽競漕舵手を招き説示された | | | |

此の如く北海の男子は遂に最終の勝利をしめた、時に満場の観覧者を始め委員等一切に鯨波をあげ其壯觀實に湖面も搖動せんばかりであつた、かくて名譽ある島根師範撰手は萬歳の聲裡に優勝旗、名譽賞を受くるや、水上にては花火を打ちあげ奈良音樂隊、濃尾育兒院は奏樂し實にのゝしく感じられた、かくて午後四時十五分一發の號砲は全く了結をつけた。

右の内第二回、第三回、及第十一回の某校（或は俱樂部）撰手の如きは決勝の砲轟くや一時漕ぐことを中止した、

此等は競漕の目的を知らないものである、

三、生徒の風紀、當度の會集の如きは各校生徒の風紀を見るに唯一の好時機である、然しこゝに一の妨害がある、其は外でない、各生徒の十中の八九迄は畠装で袴に夏帽といふ風であるから、何處の生徒かさつぱりはからん、故に殘念ながら一々委しく記すことが出來なかつた、否寧ろ一二より見聞出來なかつた。

又競漕の當日正装して居つたのは恐らく當校だけであるが、余は不覺に感嘆にたへられなかつた、

四、來訪諸子、今回（八月三日午後二時より同四日午後六時迄）左記の諸氏は撰手諸君を鯨市又は會場へ訪問された、こゝにその姓名を錄し、其の厚意を謝し置く、

中川太一君、太田有秋君、大神正秋君、堀田圭藏君、柴田孝四郎君、山田褒雄君、宮村善次郎君、

布部孝太郎君、小西龜三君、収宗賢君、目加田平三郎君、多胡庄次君、（以上卒業生）
山本小五郎君、廣瀬勘次郎君、藤林信教君、室谷喬三君、河部七次郎君、松岡勵君、白井恒次郎君、廣崎浩三君、杉本哲三君、大目方正隆君、北村力君、桐田謙三郎君（以上在學生）

（何分混雜につき以上の外見もらしなきや計りれず一言以て断りおく）

又右の外に金龜佛教中學校の撰手の内の人人が一度鯨市に訪はれたそうだ、

◎武徳會短艇競漕會雑観

自分は廣瀬氏の反対の方向より觀察したから、會場其他一切の記事は氏のものせられしよ徵せられたい。

競漕前日

▲大津市内の雜踏

吾々が大津に著いたのが、恰度三日の午後であつた足を市内に投すれば、先づ、骨逞ましい黒い顔の袴

やがて二階に案内されて、平瀬先生に會うていろいろ模様を聞いて、次で、選手諸君に會ふた。が……淺黒い顔が……平生より瘠せて居らるゝやうに感じた。三伏の暑さ、而も一學期の試験に脳を苦めた舉句、朝な夕な、浪を枕よ練習に練習せられた苦

勞が坐ろに憚ばれて……見た吾は涙である……涙は留まらなかつた。嗚呼感謝、吾人は涙を以て感謝する。勝敗は時の運である。吾人は勝敗を眼目として居らない。男らしい、すばらしい、勇ましい競漕をせんが爲めである。他校はいざ知らず。勝を以て唯一の目的とするならば。その手段(練習)は多く見出だされるであろう。されど吾校は之を眼目として居ないのである。そは豫め、四百有餘の健兒が、胸裏に往來しているであろう。否、深く刻まれてあるだらう。期せん哉や吾人は、選手諸君が勇ましい、男らしい振舞を!

因に云ふ、水上部理事花木君は七月三十日頃から來津して、世話人として、選手の爲めに大に斡旋せられた。茲に併せて謝する所以である。

▲前夜木下京都帝國大學總長の演説

月は淡く東の連峰の一角から登つて、斜めに、澄み亘つた湖上に映じ、恰も兎の波上を走つてゐるかの觀を呈してゐる。静かなる夜の幕は下ろされたて明

らずと信ず、然り而して事教育的たる以上は決して人目をして喜ばしむるが如き感念秋毫存すべからず妄りよ妙技卓藝を致し、徒に觀者が賞賛を求むが如きは彼の俳優と何ぞ撰まんや、而も此幣風は將よ我運動界に侵入しつゝあり、請ふ諸子、此青年の競技たるや一面には一個人の体格を矯正し、他面には各人の志氣を振興する目的たるを忘るべからず、近來端艇野球の如き新輸入の競技よ於ては兎角禮義の点に於て缺くる所あるを見る、而して此等が創起地を考ふるに決して然らず、余が過日、英國に漫遊されし毛利男爵より傳聞せし所により之が一例をあぐ、英國に於ては毎年一回テームス河上に於て端艇競漕會の舉行あり、これ全國各種の學校生徒の團体よりなるもの、即明日の競漕會と同性のものなり、而して此會や終始三日に涉り、最終の日、連日中の最優等の二更選ばれて競ふを例とせり、一歳イートンコレージの撰手とケンブリッヂのセントジョンズコレージの撰手とが撰に當り競漕することとなりき

日は晴天なれかしと祈るは十人同じ心であるであらう。平瀬先生と共に選手諸君は木下京都帝國大學總長の演説を聽きにゆかれた。選手及び世話人のみとの事に吾々は行かれなかつて大に殘念であつた。平瀬先生に聞けば要旨はかうであつた。

◎木下大學總長訓示演説

(八月三日大津交道館よ於て)

余は武德會が琵琶湖に於ける短艇競漕の委員長の職たるを以て聊同會の今後に於ける方針よつき一言せんこす、

拠現今青年團體の競技運動に凡二種存す、即ち一は娛樂的にして他は教育的なり、かの小學校生徒の催す運動會、或は祭祀等々執行するもの如きは何れも前者に屬すと信ず、然れども這般の競漕會の如き苟も青年たるもの、團體を成形し、以て平素練習する所の目的をこゝに顯表せんとするが如きは何ぞ一種の娛樂ならんや、是後者即教育的に屬せざるべか

然るに豫撰競漕の結果、イートンコレージの勝たるや蓋し英國一般の定論にして、各競技者自身も確乎として疑はざりき、己に競漕線に至り程なく發砲轟きしが怪むべし、負味かセントジョーンコレーデが遙に進漕したり、於是先進の舵手は顧み、敵手の用意不充分の内に發砲せしことを見るや直に擢を止め引きかへし、競漕を新よせんことを乞へり審判者は此請を入れ再び競ひしに果して豫期の如くイートンコレーデの勝よ歸したりと、

諸子此を以て如何となすか、如上の事實我國に於て決して少しあらず、而も其結果たるや常に厭しき苦情となる、噫英國のかく世界に雄飛し列強に覇たる所以の者は決して單に富豊をのみ以てならず、抑此德義侠義の無形的に存すればなり、かく余は例を外邦に取るを雖我國も古來亦此例に乏しからずかの吾々が祖先を見よ義節の爲には死も顧ざる如き諸子の常々聞くところなるべし、然るに前述の如く近來新輸入競技に至りては漸く德義の減退するに至りぬ、

此れ實に遺憾に堪へざるなり、願くば諸子勝利を以て最終の目的となさず、虛心平氣以て自己が修得せし事柄を實地に行ふの精心を以てせられ、并て紀律秩序を整然たらしめられんことを望む（下略）

てゐるから、宛然各國學生展覽會の觀がある。各國學生の風紀がよくあらはれてゐる。余等は選手諸君と別れて短艇に乗つて湖上に浮び、廣瀬氏と方向をかへて觀察しやうと企つた。

島村鉄翁の第三回春に開けた魚市に行ひ、そのことを記憶されたい。

競漕當日（四日）

曉の風湖面を拂つてくさ枕、旅の假寐の夢を破つた
起きて戸をおせばしのゝめの空、朝噭麗かゝ、鳩の
湖は小波の笑みを湛ゑて、遙かに浮見堂かと思はる
ゝがちらほら見ゆる。西明峰は翠をこめて、けふ……
……幾多の勇夫が晴れの戦場に一段の光彩を放つて
ゐるかのやうに見ゆる。

▲會場附近

午前七時頃から追ひ／＼つめかける参觀人で會場附近は人の黒山を築いてゐた。空しくあちらこちらと徘徊ふてゐるのは會員章を持たぬ連中であろう。兎も角、其參觀人は軍人とか、學生とかゝ多數を占め

は論評して、言ふやう、かの名譽の優勝旗を握るは島根の快男兒の、天玉寺中學か、はた滋賀師範かと。あゝ好敵手！腕を較べんには畢竟の敵手である。劉朗たる樂聲に送られて三艇は小蒸漁船に曳かれて行く。

白はクラツチのあたりに手を置き、赤は腕をくみつゝ、青（我校）は落附き拂つて曳かれて行くのである。勝敗は天の與ふる所。吾人は敢て念頭におかない。男らしく勝ち、男らしく敗せんこそ望む所なれど、やがて三艇はスタート、ラインより舳を併べた。

であつた。白は第三コースで悠々せまらず四拾のビッチを引いて、青は第一コースで臆するなくビッチのいたかに漕ぎ出した。赤は青を援く半艇身、漸く力をゆるめてゐる様子、青はこの機を逸せず、奮然進んで之を制し、續いて白をも一漕の下より仆はさんと企て、白之に應じて力漕甚だめた、……

▲湖上よりの光景

短艇は漣波を蹴つてはしなく湖上に浮んだ。満艦飾の小蒸氣船、さては小舟などが青湖原に浮んで、其間に水上警察の偵査船が幾艘となく配置されて、層一層の景趣を添へてゐる。そこで、此處にはボートに乗つて一競漕毎に、赤ア——青ツ——と聲援する彌次馬連が馳せまわつてゐる。殊にすばらしかつたは大津同窓會の出漕に方り、大津小學生徒連が赤旗打振り打振り、應援したのであつた。

▲本校出漕湖上觀

一回、二回、三回、四回と過ぎて何時しか第五回となつた。第五回…………これ實に我校の健兒が腕を試すべき晴れの戦場、敵は名に負ふ島根師範（白）と大坂第五中學校（赤）とである。同日の滋賀日出

蛇…………驀然白は先づ決勝線に入つた。我が健兒は次いで着した。赤は之に次いで着したのである。

赤は從來、練習に於て好成績の

赤は從來、練習に於て好成績の譽ありしに拘はらず
第三着の見苦しき失敗を招きしは實に惜むべし云々^{大坂谷口は嘆して言ひ}
男らしく勝ち、男らしく敗したのであるから、其間に
に一點の耻づべき點がない。唯々吾人は選手諸君に
深くその榮を多とするものである。寄語す、島根の
快男兒！山陰の健兒！明年を期してまた花々しく共
に中原に鹿を追はん。

金我好個の敵手

禮讓自ら處し、敢て大言を吐かず、敢て傲らず、實に男らしく勝つたのは島根師範の選手諸君である。吾人は山陰宍道湖の邊に吾人の好敵手あることを知つた。それと共に最も親愛なる校友があることを信

山間僻隅の田舎漢、兄等が陰庇によつて勝を得た

り希くば明年再び兄等が教を受んかな。

とは別かるよ臨んで余等を阜頭に送つて彼等が言ふた言の葉である。あゝ言や意外で、舉や意外の感である。これが當日の競漕會に於ての霸王の言行とは思はれない。吾人はこれ等の一舉を以て確かに名譽の優勝旗を握り得た原因を覗ひ得た。噫々好敵手！再び三保岬頭に會して談笑したいものである。

(完)

◎三保が崎短艇大會雑記追録

澤村專太郎

第貳學期の授業が開始さるや、先づ平瀬先生の宅で選手諸君の茶話會が開かれた、茶菓を挟んで談笑湧くが如く口角を衝いて出で、三保が崎の歴史が再び繰り廻された、今斯に吾人が其席末を汚したのを謝すると共に、其概略を摘要して以て會員諸君よ報道する所以である、席上奥村君の述べられた慷慨談は讀者が一考の好材料として、こゝに紹介する丈の價值があると思ふ、開口一番子は徐ろに説いて曰はく

の暑にも少しも倦まず撓まず、ドシ～出かけ

る、腸にしむやうな寒さ、指もちぎれるやうな嚴冬、よ出かけるなどはあたり前だと心得て居る、この熱心、この霸氣があつて初めて今日の發達を形づくつたのだ、それに本校などは、冬となれば端艇は濠の藻の中に沈ひで居る、これは水上運動部が貸さないので言ふ人があるだろうけれども、これども會員諸君が冰雪を冒して湖上に怒濤を叱する勇氣がなかつた、畢竟會員諸君が悪いのである、この大湖を面前に控へて居り乍ら、然もボートは空しく汚腐せんとして居るのである、之を同志社の諸君よ見せたら何と言はれるだろう、我會員中には紛々たる風雪を冒して、鳩の湖山に扇舟を操り、クラッヂの響に快哉を叫ぶ男子はないのであるらか嗚呼、何等の壯語ぞ、はた何等の快談ぞ、吾人は斯の如き人を得て、我運動界の活動を、満天下よ示すことを得るだろと豫期するのである、子は更に語

を繼いで曰はく

彼の社では卒業生諸氏が、熱心にもわざく休暇を利用して、在舍生と共に浪を枕にして舊懷を談じ且大に漕法を教へられるそらだ、本校の如きはやうだ……ア、……われは言ふに忍びない……

先輩諸君と在學生との關係を、親密にせざるべからずとは、常に余輩の念頭を去らない事である、語を寄す、諸君、先輩諸君、本校を以て他家視せず、ある年以前は、兄等が第二の家とせられた本校の爲めに、大に盡さるゝ所がありたいものである、尙語をついで、

我校は一般に氣概がない、言ひ換へれば勇氣が乏しい、小成よ安んずるのが多い様である、たま～ボートにでも行けば、小さな艦舟を制してそれに満足して快哉を叫んでゐる、ア、思へばに實なさけない、何たる意氣地のないことだろう……われの十五歳の時だつたかと思ふ

水上運動界に於て、關西に敵なしと歌はれた同志社の位置はどうであろう、其發達は如何程のステップを以て進行したか、はた其原因は如何と云へば人或は應答よ苦しむだらう、其位置たる山を以て圍まれて、扁舟を操るべき水だにない、然もこの進歩……人の答へられないのも無理はない、が、これには大なる原因があつて存するので、決して不思議はないのである、これは即ち熱心から生じた結果だと思ふ、熱心……熱心は實に彼を水上運動の大王と云はしめた原因である、その初は同志社の端艇として湖上或は其他の場所に泛べられたのはなかつた、彼等は土曜日となれば、午後二時頃から、冷飯を噛り自ら仕拂ふて一艘のボートを借受け、湖上を乗りまわつて僅か半日の快を恣にして、また山越に京都へ歸國、往復六里の山道、それを三伏

ボートを湖より泛べて石山の方へと舳を向けた事があつた、その時他に一艘のボートが石山の方に漕いで行くのがあつて、互に漕いで暗よ競漕をやつた、われ等の艇は悉く年少計りだつたら、漕法も充分熟して居なかつたが、如何にも他の艇よ敗をとるのが口惜しいからといふので我慢に我慢をして、遂に石山迄漕ぎ續けた、讀者諸君！ 諸君はこの語を聞いて何と感じますか實に我慢力の少ないのは文弱の弊である、意氣地のないのは近畿の特徴である、諸君！ 勵奮一番、縱横に湖上を漕ぎ廻つては如何！ 又席上に獨語のやうに云ふものがあつた、

本校、クラスレースと云ふと恰も火の玉のやうに飛び廻はつて、イヤ選手の應援どとか、イヤ選手の何などか言つて、罵り騒ぎ立てる、そのくせ學校の選手などには一向應援も何もしない試験中などに練習歸りの選手に出会ふても、「今頃鳥路／＼何處へ行つたのだ」と言はぬ計りの

顔付で、休暇になつても、自分勝手にズラ／＼遊び廻る暇はあつても、僅か一二時間波止場へ来て選手を勞ふものは全くゼロだ、特別會員の方々も、（隨分多用ではあるが）一向見ぬないイヤ實に選手になる身は心細いよ！ 實よ然りである、最千萬の話である、クラスレースはつまり内輪の仕事である、何ぞ狂ひまわるの要あらんやだ、然るに此本校生は、妙な處へ力を入れて大切な事には頗る冷淡だ、これは實に面白からぬ習慣だと思ふ、會員諸君の考一考を煩はしたい、それと共に特別會員の諸氏へも御一考を願いたいものである、

菓子は竭きない、茶は湛えられてある、けれども話はハタと盡きた、城山の山風が颯つと障子をたゝいて、梟の鳴聲が深夜の寂寥を破つて、深けゆく夜を報せ顔に聞こむる、やがて茶話の宴は閉ぢられたから各々先生の門を辭して思ひ／＼に家路をさして歸りをいそいだ。

◎山本先生を迎ふ

我校は又新たに山本先生

生を聘して、体操科教授の任を托せられぬ、時維れ九月十一日、初討面の式を擧げらる、先生もと實戰地をふみ、永年劍銃これ共にせられし人、今や劍銃と共に亦吾人を教授せられんとす、我校將來斯科の精達、又悦ばしからずや

◎卒業生紀念花壇 第十四學年（明治三十三年）卒業生醵金して本校博物教室の南方に紀念の花壇を建設せり而して其工事は職員及小使の手によりて成れり美舉と云ふべし其計算如左

| | |
|---------|----------|
| 一金九圓拾錢 | 醵金額 |
| 内 | |
| 金四圓參拾錢 | 花園一ヶ所 |
| 金四圓八拾錢 | 同 二ヶ所 |
| 此仕譯 | |
| 金貳圓七拾壹錢 | 煉化二百二十本代 |
| 金壹圓六錢 | 真砂八車代 |
| 金壹圓三錢 | 人夫三人賃 |

已上

◎加部先生を送る

明治卅一年の霜月初めか

たなりき、白髮の老翁意氣壯に、杖を揮ふて吾人壯丁を導き給ひ、遠く青丹よし奈良の都に杯を傾けて青年の本領を快談せられし老翁は誰ぞ、今や此校を去りて、石見の國へ歸り給ひたる加部嚴夫先生其人なり、思ひ回はせば明治卅一年の頃なりき、校は亂れて麻の如く、漸く坂田校長を得て、大に經營せられたる時、鞭を我校にとり給ひしなりき、爾來萬住四星霜、晨には嚴客生等を導かれ、夕には温顏笑を湛へて士氣を鼓舞し、現今青年の無氣概を嘆せられ、師にして友の如く、友にして師の如く、和氣藹々時に大喝一睨虎の如く、時に洪笑一番、兒に似たり、數へ来る此四年の間、いかに先生の爲に訓化されしもの、偉大なるよ、嗚呼此恩師は去つて我校に非す、遠く石見の國に慷慨の氣を歌ひ給ひつ、あるを奈何せん、先生此地を去らるゝの日、九月七日、嗚呼吾人は涙を以て先生を送り、又再び先生に徊返

するのを期して、冀くば先生の温客に接し、此董陶を受けんことを望む、と共に、意氣壯にして少壯者の如き先生の益々健在よあらせられんことを切に希ふものなり、

◎廣田、小出兩先生 廣田、小出兩先生曾て一年志願兵として身を軍籍に置かれしが今回勤務演習の爲め廣田先生は歩兵第九聯隊に小出先生は工兵第四大隊に何れも入隊せられたり、爾後三ヶ月間生等親しく薰陶に浴するを得ず不幸之れに過ぎずと雖國家の爲め大に此行を壯にすべきなり生等は両先生の益々健勝に能く此大任を果さんれことを遙に希望する所なり

◎矢板視學官演説 九月十五日、矢板視學官來校せられ、午前九時生徒一同に教訓的演説ありたり、今其の大畧を擧ぐれば左の如し、

本校には崇廣會てふ會ありて、文學上、運動上、兩方面に於て、切磋研磨せらるゝことは、予の既に知る所なるが、未だ其の會よ臨み、諸君の高論卓説を

聞き、且つは予が年來の持論を發表するの機を得ざるは、深く遺憾とする所なり、
掲本日諸君よ此に會し、話さんと欲する所は本より多しと雖も、僅々一少時間にて、到底言ひ盡す可きにあらざれば、先づ本日は、學問の經濟的研究に就て些か述べる所あらんとす、

世人多く經濟不經濟の言をなすと雖も、學問上より簡単に之れが定義を下せば、經濟とは、必人間生活上必須なる種々のものをして、常に豊富ならしむる方法を云ふ、故に經濟をなすに當り、第一念頭よ浮ぶものは費用の寡少にして、所得の豊多ならんことなり而して刻苦經營此の目的を達せんとする行爲を經濟的行爲と稱せり、

如此經濟なる語は、世上普通に所謂經濟とは、其意味非常に廣きものなれども、今日予が話さんとする所のものは、單に其の中の一部なる、學問上の經濟にあり、而して此の學問上の經濟には、其の方法種々ある可しと雖も、要は左の三点に歸するものゝ如

し、
一、身體の健康を保持すること、
二、志に向て直進すること、

三、記憶力を強くすること、

一、身體の健康を保持することは、學問上大關係を有するものにして、道義的行爲に於ても、又少からざる關係を有するものなり、彼の規律正しく、德行修られる人の多くは、身體壯健にして、此れに反し不規則怠漫なる人は多く身體も亦虛弱なるは則ち此れなり、故に畢竟道德と云ふも、衛生と云ふもある点に於て一致せる者なり、然れば道德上より見るも大よ身體を保持するの必要を觀るなり、

二、志に向て直進することは、之れ實に難中の難事にして、深く注意するに非れば、遂に岐路に迷ひ、又如何どもする能はざるゝ至るものなり、故に學生たるものは、故に學生たるものは、勇猛直進、不撓不屈の精神ながらざる可からず、然るゝ動もすれば他人の爲めに誘惑され、知らず識らず迷路よ踏み入

るものあり、就中中學校の如きは、直接ある業を教ふる所にあらざれば、卒業後殊に此の弊に陥り易し中學生たるもの豈意志を強固にせざる可けんや、本縣中學生の如きは、他の中學生より比較的半途退學者多きものゝ如し、而して其の原因種々ある可けれども、其の大部分は、不健康と薄志弱行より来るもならん、如斯は以前に費したる時間、労力、費用をして、全く不經濟に終らしむるものなり、諸君よ、此の如きは此れ不經濟の最も甚たしきものなれば、以後は決して如是ことなき様深く注意せざる可からず、

又學問をする方法は可成的近道を撰び、コース一廻て勉強せざる可からず、一例を擧ぐれば、本を讀むに於ても、濫りに音調高く朗讀するが能にあらずして精しく其の要を記憶すること、これ讀書の大主眼なり、故に古人も云へり、多讀は精讀よ如かず、精讀は熟讀に如かずと、學生たるもの宜しく此言を服膺し、一卷の書を手に取れば、再三再四、精

通するよあらざれば止まざるの決心なる可からず、

日本人と西洋人と其の讀書の法に於て大に異なる点あり、日本人は書籍を矢鱈に大切にする、本より必要な洋は然らず、夫れ書籍を大切にする、徒らに形式りと雖も、其の度を過ぐるに至りては、徒らに形式に支配せられ、爲めに遂に不經濟に陥ることあり、今西洋人に讀書法の一端を擧ぐれば、西洋人は其の要所くにはマークを附し、前後の連絡をつくることこれなり、此れ實に讀書法の秘訣にして、近來我國に於ても此の法漸く行はるゝに至りしは、大に悦ぶ可きことなり、又日本人讀書の通弊とも稱す可きは、一巻の書籍たりとも、之れを完讀するは稀にして、中途或は未だ中途まで到らずして放棄するもの多きより、故に或る識者の如きは、之れを非難して云はく、學生は本を讀まずと、之れ或は過言に失するの恐れなきにあらざれども、又以て現今學生の弊風を見るに足る、諸君よ希くば此の不經濟なる弊

例へば彦根と云へば城山を想起するが如し、反對の觀念とは、相反する事物の互に聯想するの謂にして例へば白を見れば黒を思ふが如し、又因縁の觀念とは、事物の原因結果の聯想にして、日清戰爭の話を聞けば、東學黨を想起するが如し、

如此法を以て、知覺力を強固にし、再現力を容易ならしむる外に猶必要なることは、則ち材料の選擇なり、實に日進月歩の今日にありては、學問の如き殊に繁雜を極むるものなれば、可成必要多きもののみを擇び、而して其の要点を記憶し、無益の時間を費さる様注意せざる可からず、然るに未だ中學時代にありては、充分其の要点を認むる丈の力無きものなれば、先生方に於て其の要点を指摘し以て、生徒の注意力を深からしめざる可からず、而して此に猶一つ注意す可きは、筆記にして一旦教場にて筆記したることは、歸宅後再び修正し、以て後日の用に備へざる可からず、彼の其の儘にして棄て置き、試験に臨みて周章狼狽一夜造りの勉強の如きは、深く誠

風に傲慢勿れ、

三、記憶とは、一旦知覺したることを再現し得る力なり、而して此の力を以て益々強からしむるには大事なり、凡二種の條件あり、

一、注意力、二、復現力、此れなり、注意力とは、吾人が知覺したる事物を、固く脳裏に印する力にして、此の力の多少は則ち記憶力の強弱に關するものなれば、何事を學ぶ當りても、第一注意力をして充分強からしめざる可からず、次に復現力とは、文字の如く一旦知覺したる事物を自由に再現し得る力にして、之れ又必要なるものなり、而して此の再現力を以て容易ならしむるには、四つの心理的原則あり、

一、類似の觀念、二接近の觀念、三、反對の觀念、四、因縁の觀念此れなり、類似の觀念とは、類似の者の聯想にして、例へば、林檎と云へば、直ちに梨を聯想するが如し、接近の觀念とは、事物の相接近し關連するより聯想を惹起するを云ふものにして、

めざる可からず、然るに此の弊我國に於て殊に甚だしく、堂々たる大學に於てすら、猶此の渦中にあるを免れざるに至りては、豈痛心の至りならずや、試に見よ、彼の學校よ於て、優に一頭地を抜き、衆望の歸する人は、一夜づくりの勉強家にあらずして、多くは經濟的勉強家なり、

されど金銭上に於ける經濟的原則に多量に利して多量に使へと云へるが如く、學問に於ても又、善く遊びて、善く勉めざる可からず、凡て西洋にありては規律正しく行はるれど、我國に於ては、未だ充分ならざるは大に遺憾とする所なり、

今や廿世紀の活世界は諸君を待ちつゝあり、宜しく志を遠大にして、充分に脩養せざる可からず、大器晩成より可なりと雖も、之れ又制限あるの語なり謹み、千難万苦を排するの大決心なる可からず、兎に角社會の繁雜なるに付け、一日一時も、充分學

問の經濟を心にし、早く此活世界に活動せられんことを希望す、と、

◎新井先生を迎ふ 加部老先生の後任として新井無二郎先生來らる、先生は防州山口の人風貌閑雅頗る威容あり、鄉校に教鞭を取らるゝ多年造詣する所尠からざりき。今や我校に來て大に國學を教授せらるゝとす生等謹んで教を奉すべきなり。

◎寄宿舍生の京都行 秋風漸く冷かゝして、青年の意氣おのづから壯なる時、寄宿舍生八十餘名は、洛陽の山水に清趣雅致を掬せんとて、京都に秋季遠足を催せり、

九月二十三日、小夜ふけて、城山の鐘聲九杵を報ずる時、當地波止場より、濱船長濱丸よ塔じて大津に向ひぬ、

十日餘りの月湖上に浮へて、水波漾々金龍の跳るよ似たり、

甲板の上に佇んで月を賞するものあり、船房に横て詩を吟するものあり、湖上の仙界誰れか、其の快味

幽邃掬す可し

大路數町、櫻馬場を過ぎ、應天門下よ參拜して、京都大學に至る、門監よ導かれて、構内の諸建物を縱覽し、（内部を見るを得ざりしは遺憾なりし）大學生の「ヨンテニス」を傍観すること時餘、更よ第三高等學校に到る、我校出身にて同校在學の諸氏、一行を迎へて、特に茶菓を饗せられたり、此に其の厚意を謝す、

一同晝食、午後解散、由自散歩を許さる、午后三時

蹴上げより舳艤相衝み、疏水を廻る、

昏黃大津よ着す、池田先生の宅にて茶菓の饗を受け各自夕食して、午後八時再び濱船に塔じ、一睡頃よ彦根に着し、無事坂舍せり、時に廿四日午后十二時

◎剣道柔道發會式 無情なる經費、情なき金。彼等は苟も日本の武道を、研磨する日本の國士に、吾人の自由を許さず、これが爲延遷終に今日に到りたる剣柔兩道は漸く今日、これを見ることを得るに至りぬ、

を知るものぞ、

人聲絶へて、殘月水に沒する頃、濱船はやがて大津に着きぬ、

一行は直ちに歩を進め、寂莫たる長等山を辿り、逢阪の關趾を過ぎ、大谷を經て蹴上げに達しぬ、

此に人員点呼を了へて、更らに圓山公園よ至りて解散し、各樹の下蔭、板屋の軒よ横臥して、暫時假寐の夢を結びつ、

蒲團衣て寐たる姿の東山と云ひけん、その東山の曉色を露しげき草枕の頭をもだげて見るも面白し、既にして一行こゝを發して、清水に向ふ、遠近雞鳴の聲を聞く、

一同は彼の忠僕茶屋よ喫飯し、更よ引返して知恩院堂下よ出づ、

莊嚴なる樓閣、輪奐たる伽羅、樹林の間に散見して噴の聲山水に響く、

此日來賓として、三十名余の名士を招し、兩先生門弟十余人の來會を辱ふしぬ、先づ校長は崇廣會長とせられぬ、

此日來賓として、三十名余の名士を招し、兩先生門弟十余人の來會を辱ふしぬ、先づ校長は崇廣會長として、來賓諸氏に向つて、今日諸氏の此式場に來會せられたるの厚意を謝し、又會員一同に對して、柔劍の両道は、技藝に非ず、道なり、決して其の禮儀、作法を忽みすべきに非ず、例へ伎の上に勝つとも、禮なく儀なんくんば、柔劍両道の勝といふべきに非ず、即ち禮義作法を盡して、勝を制するは日本の武士道なるなり、

若し事に托して、これが研磨を免れんとするが如き、精神の腐敗したるものは、卑怯者、意氣地なし、として、男子の價値なきものと認め、斷然、禪預りの耻を與ふべし、諸子は奮つて、

練習せよ。

の辭を陳べ、終つて山上松井兩先生及び坂先生、吉井先生の、初對面式を擧げられ式を終るや、運動場に於て柔劍兩道の仕合を開始せらる運動場には中央に十余の壘を敷きて演武場となす、長友犬上郡長先づ剣道の心得を説かる、其風采雄偉、片手に、一本の竹刀を握み、從容口を開いて曰く、

予も少時斯道を學びたるとあり、今日校長の請に従ひ、聊か斯道に付きて、一片の注意を述べん抑々吾人の學ぶ所の剣道は勿論、凡ての武術は人を斬り、人に勝んが爲に學ぶものに非ず、人よ勝つよりは、寧ろ自分の身を護り、いよいよ大事に臨みて、泰然動かず、從容として死に就く、といふ精神を養ひ、心膽を練磨する爲のものである、然して斯道を修め、此精神を養ふに先づ四ヶ條は分れたる訓戒あり、

恐れぬこと、驚かぬこと、迷はぬこと、疑はぬこと、

の四ヶ條は、即ち如何なる大事に臨むとも、盤石の如く動かざる精神これなり、今又敵と相對して、敵の竹刀を睥むものは、これ敵の精神を見るのである、虚勢を以て敵の精神を伺ふのである、もし此時よ當り、此場合に臨みて、此四ヶ條の精神を忘れ、失ふたならば敵は直に自分の虚に乘込むのである、これが即氣合なり、兎角、己が眼と精神を一本の竹刀の中に込め入れて、充分に氣合を伺ふものなり、さりむすぶ太刀の下こそ地獄なれ云々といふ歌の如く、自分の精神を一本の竹刀の中に込め入れて、敵と對すれば、宮本武蔵の如き剣道の達人といへども、如何など、これに抗するを得ん他なし此一本の竹刀は、即精神に外ならないのである。

事に當りて動かず、從容死に就くの大度胸は、即ち此竹刀にて、養ひ得るものなり、

世よ曰ふ、生兵法は大創の基、とは最も初心者

の戒しむべきところ、慄じひ少の剣道を學べば直よ人に逆らはんとする弊よ陥りやすいこれは深く戒めねばならぬ

次に苟も忘るべからざるは禮法なり、昔は公然と太刀を腰にし得たる士人が、容易に之を抜くことを成さうしは、これ武士の最重んずべき禮法なるものあればなり、諸子は決して此禮法を忽にすべからず、

と語り畢らるゝや、柔道の形あり、之に先きだち、山上先生語りて曰く、柔に人に當るは柔道の主眼、決して力込めに、爲すべきものゝ非すと、

先づ其受方は先生が一の門弟門根米次郎、にして、其他揚武館よりは大橋氏、今津氏、岩根氏、本多氏にして、本會員にては小川、藤田、松岡、淺見の諸子々して皆共に、不動流山上先生の門弟なり、今その形を列舉すれば、胸取、投捨、横渡り、車返シ絹被キ、体月、臂罩返シ、翼取、源氏車、の九種にして、ヤツと握めば、一点の隙なく、一点犯べかず

らざる、不動流の形、まして撰り抜きたる、形の見事サ、エイヤと投げては、觀衆の膽を寒みし、エイと返しては、手に汗を握らす、シツカと坐すれば、又も動くべしとも思はれず、流石は不動の一派、天晴れ見事なり之を終りて、先生が形に就て説明あり又曰く、武術は眞摯、乞ふ笑ふことを止めよ、と満坐肅然更に亂取の試合あり、

西村と大曾根、猫の轉々が如く、上になり、下にな

り、西村こゝぞと、籠手ナタ取れば、何だ抜ける、大曾根の早業、終に大曾根、手ナタ、を以て西村を参らしける、

松岡と岩根氏、揚武館まで一里何町といふ路、毎晚通り給ふは岩根の大將、いづれ劣らぬ、剛將勇士シツカと組み伏せつ組せ伏せられつ、砂の上に争ふ、犬の喧嘩よろしく、ソラ今岩根が胴やられたと手よ汗握るものあるに、スラツと引抜く、手練手並、これは中々大したものと見る間に双方は、角力ならば水入れといふ所、

藤田よ本多氏、双方中々立派な男、コリヤ見事だと先づ目に付くは藤田の襦袢、意匠を凝らせし御紋付ヤオラ身を立てしかと覺しく、一向組付かぬ、藤田の容子、怪しと見る間に、ドツと近寄る本多をば、キレイよ引掛けし、投げ一本、

コレハと飛び寄る本多の君に、又もおかしな、腰ぶり、手付き、足先きまでが、と見る中よ、又もお得意の、……十八番の……投げて一本、ヤツと一聲、藤田の勝、

亂取やう／＼終れば、亂取稽古の有狀、これ尤も初進者の氣を付くべきもの、これを終りて、剣道仕合を始めぬ、

廣崎一大東、大日方一川並、西村一小川ごだん／＼進んで、さて面白きが、藤田一門根、いづれも劣らぬ、荒くれ男の暴ばれ者、否々太刀先中々迅くしてソレお面といふかと思へば、お胴と一本、左様で御座るかといふ昔の文句は、藤田が氣取りし一瞬の洒落、竹刀は迅し、氣合は充ち、活潑に勇壯に、飛び

入るところを、防いて斬り付くる太刀先、早くも終にお面ツの聲諸共門根の勝に歸しぬ、之に次いで、廣瀬一中川、足元据はらず、体整はず兎角に手を縮む廣瀬のスタイル、終に胴で一本、廣瀬の負け。

岩根氏一今津氏、お突きだ、お小手、の諸聲共に、勝は岩根氏の者となりぬ、岩根氏一本多氏、の仕合は、揚武館一流の太刀先、鋭く、いづれ劣らぬ、吉井門下の名代のお弟子、ハツシと打つ小手は流れて終に面一本、手ひそくも岩根氏の敗となりぬ、時に小雨蕭々と降り出でしが、茲に全く終を告げ、來賓諸氏に茶菓を饗應ありたり、

◎草取 五旬の夏季休業に雜草茫茫々運動場裡に繁茂し我最愛の校庭は徒に蟲類の住所となれりよつて例年の如く生徒級別々區分して數日の間に取盡せり庶幾くば四百の健兒能く其靴底に踏みよじり爲めに寸草の再生するなからんを、

會 告

水上運動部 陸上運動部

第五條 本會々員ハ會費トシテ左ノ規定ニ從ヒ出金

スペシ

本校職員ハ會費トシテ各自適宜ニ凡ソ月俸百分ノ一ヲ標準トシテ寄附スルモノトス

ナントス

但遠隔ノ地ニ在ル者ハ毎月十日迄ニ本會ニ納付スペシ

ナントス

本校生徒ハ毎月金拾錢ヲ會計ニ納ムベシ

但止ムヲ得ザル理由アリテ半途退會スルモ既納ノ會費ハ返戻セス

ナントス

本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長一名本校校長ヲ推ス

會長ハ本會ノ事務ヲ總理ス

副會長一名職員中ヨリ選定ス

副會長ハ會長ノ事務ヲ補佐ス

會長ハ本會ノ事務ヲ總理ス

副會長一名職員中ヨリ選定ス

會長ハ本會ノ事務ヲ總理ス

副會長一名職員中ヨリ選定ス

會長ハ本會ノ事務ヲ總理ス

會長ハ本會ノ事務ヲ總理ス

副會長一名職員中ヨリ選定ス

會長ハ本會ノ事務ヲ總理ス

副會長一名職員中ヨリ選定ス

會長ハ本會ノ事務ヲ總理ス

會長ハ本會ノ事務ヲ總理ス

副會長一名職員中ヨリ選定ス

會長ハ本會ノ事務ヲ總理ス

桐田謙一郎
北岸利太郎
山本久治郎
近野留三郎
小林信三
西川藤三郎
森光雄
藤井頼海
東野童健
田中時治郎
白石滋男
竹中信吉
山口増三
中矢代敏雄
竹中慧照
鈴木長次郎
辻達巖
藤井巖
福原宗太郎
竹内篤太郎
藤居平三郎
脇利右衛門
濱野増平
谷澤齊一

| | |
|-----------------|----------|
| 同 | 磯田村字八坂 |
| 同 | 彦根町字池淵 |
| 同 | 宇江戸 |
| 滋賀縣滿生郡八幡町字永原上 | 同 |
| 同 | 南北都佐村字清田 |
| 愛知郡愛知川村字長野 | 同 |
| 犬上郡久德村字八重練 | 同 |
| 坂田郡長濱町字宮 | 同 |
| 法性寺村字飯村 | 同 |
| 息長村字能登瀬 | 同 |
| 神崎郡旭村字伊野部 | 同 |
| 犬上郡日夏村第二百五十七番地 | 同 |
| 東淺井郡竹生村字益田 | 同 |
| 大上郡彦根町字芦橋十二町目 | 同 |
| 愛知郡秦川村字竹原谷 | 同 |
| 東淺井郡朝日村字梅老江 | 同 |
| 愛知郡豐國村字豐滿 | 同 |
| 坂田郡大原村字市場 | 同 |
| 神崎郡御園村字林田 | 同 |
| 愛知郡豐振村字小田芥 | 同 |
| 靜岡縣小笠郡池新田村字池新田 | 同 |
| 犬上郡彦根町芹橋十二町目 | 同 |
| 愛知郡稻枝村字稻部 | 同 |
| 滋賀縣東淺井郡竹生村太字安養寺 | 同 |
| 犬上郡彦根町字土橋 | 同 |

田中源之進
辻 寛 鎮
平野 格 義
野間 莊三郎
藤澤信次郎
谷川寅吉
吉田久一郎
若森梅三郎
日比松三郎
宮野專太郎
布施幹三郎
藤岡哲英
小笠俊男
關 定三
西堀甚五郎
西 村 亮三
西澤彌三郎
堀田 三朗
木村清三郎
西澤徳治郎
折笠 晴俊
向阪 文右衛門
尾川 織市
野阪光一
橋本源次郎

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
犬上郡彦根町字芦橋十四丁目
東淺井郡速水村字高田
犬上郡東甲良村字長寺
坂田郡伊吹村字彌高
犬上郡彦根町字芹橋九丁目
愛知郡東押立村字平松
滋賀縣愛知郡秦川村字竹原谷
坂田郡大原村字池下
同 長濱町字大手
同 神崎郡八日市町字重屋
犬上郡北青柳村字中藪
同 福満村字西今
坂田郡鳥居本村字鳥居本
栗田郡常盤村字志那
犬上郡彦根町片橋九丁目
同 同 字下藪下
坂田郡神照村字口分田
同 太原村字野一色
伊香郡片岡村字國安
同 木之本村字千田
犬上郡千本村字野田山
高嶋郡水尾村字大鷹

滋賀縣愛知郡愛知川村大字愛知
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
伊香郡木之本村大字木之本
東淺井郡下草野村大字乘倉
愛知郡秦川村大字安孫子
坂田郡大原村大字夫滿
坂田郡東黑田村大字志賀谷
犬上郡彦根町大字芹橋十五丁目
犬上郡東甲良村大字池寺
要太郡常盤村大字穴
伊香郡木之本村大字黒田
神崎郡南五箇莊村大字川並
犬上郡豊郷村大字雨降野
犬上郡高宮村大字高宮
坂田郡柏原村大字柏原
犬上郡彦根町大字四十九
愛知郡日枝村大字上枝
長野縣東筑摩郡松本町
滋賀縣神崎郡旭村大字伊野部
同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
伊香郡古保利村大字西野
犬上郡大瀧村大字櫛崎
蒲生郡北比都村大字十禪師
東淺井郡大郷村大字落合
犬上郡高宮村大字高宮
愛知郡葉枝見村大字本庄
犬上郡彦根町大字伊賀

千田剛一
小泉善太郎
塚口佐太郎
森田寛助
谷田重好
明石義信
塚本助治郎
富永雅丸
北川陸郎
宇田金作
小堀良太郎
藤井敏
川口敏
重森平一郎
橋本忠太郎
山田善三
平尾良三
小林郁郎
德田秀次郎
三浦經五郎

川瀬竹次郎君

長崎尙次郎君

水野政助君

森居三二君

廣田吉三郎君

眞塚長平君

大庭永正郎君

佐藤鉄治郎君

有川讓吉君

小室義明君

可須水正吉君

福永佳辰郎君

平瀬東男郎君

市川黒田郎君

大橋純一郎君

福永佳辰郎君

河村細江忠一郎君

片野省一郎君

林隆太郎君

松浦謙吉郎君

芝原岩次郎君

中村改一郎君

吉田藤之助郎君

吉田森之助郎君

杉本榮一郎君

溝江永弘郎君

梅本善四郎君

山田隆吉郎君

坂田郡彦根町大字芦橋六丁目

一金貳圓

一金壹圓

一金貳圓

一金壹圓

一金貳圓

一金壹圓

一金貳圓

一金貳圓

一金貳圓

一金貳圓

一金貳圓

○明治三十三度(自卅三年四月
至廿四年三月)収支決算報告

| | |
|----------|---------|
| 收入之部 | |
| 前年ヨリ繰越 | 貳、六五〇 |
| 預ヶ金利子 | 參、壹四七 |
| 合計 | |
| 差引 | |
| 高 残 | 壹貳參、九八壹 |
| 但二十四年へ繰越 | 五四七、六七六 |

| 生徒會費 | |
|---------|---------|
| 職員寄附金 | 四五八、八〇〇 |
| 同特別寄附金 | 八六、四〇〇 |
| 雜收入 | 五壹、六四〇 |
| 合計 | 六九、〇〇〇 |
| 支出之部 | |
| 演說討論部支拂 | 貳〇、八四〇 |
| 雜誌部支拂 | 壹四〇、貳四五 |
| 水上部支拂 | 貳四八、〇〇〇 |
| 陸上部支拂 | 壹參八、五九壹 |
| 豫備費 | 〇、〇 |
| 合計 | 六七一、六五七 |

○寄贈雑誌

| | | |
|-------|-------|-----------|
| 燐々會雜誌 | 第七拾壹號 | 久留米明善校燐々會 |
| 尚志會雜誌 | 第四拾貳號 | 第二高等學校尚志會 |
| 渴漏の音 | 第一號 | 德鳴中學同志會 |
| 燐々會雜誌 | 第七拾貳號 | 久留米明善校燐々會 |

| | | |
|---------|-----------|-----------|
| 燐々會雜誌 | 第七拾壹號 | 久留米明善校燐々會 |
| 花木英留次郎君 | 第二高等學校尚志會 | 廣田七次郎君 |
| 松宮重太郎君 | 德鳴中學同志會 | 小林正策君 |
| 近江商業銀行 | 第三齊齊藤信君 | 大庭永正世 |
| 廣野織造君 | 第四拾貳號 | 梅影三馨君 |
| 花木英留次郎君 | 第一號 | 廣田吉三郎君 |
| 松宮重太郎君 | 德鳴中學同志會 | 森居三二君 |
| 近江商業銀行 | 第七拾壹號 | 眞塚長平君 |

◎ 投 稿 規 則

一、投稿ハ學術ノ範圍ニ於テシ決シテ政治的時事論ニ涉ルベカラズ
一、投稿ハ本會所定ノ用紙ニ楷書ニテ認メ假名ハ平假名ヲ用フベシ
一、投稿ニハ各自句点ヲ施スベシサレド圈点ハ一切施スユトヲ禁ズ
一、投稿等其篇ヲ異ニスル毎ニ其用紙ヲ改メ題ノ下ニ級組及ビ氏名
ヲ明記スベシ

一、投稿ハ其長短ヲ問ハズ總テ全篇完備セルモノタルベシ
一、投稿ハ其掲否ニ關ラズスペテ之ヲ反戻セズ
一、投稿ノ締切期限ハ其都度之ヲ定メテ一般ニ通知スルモノトス

明治二十七年五月三十日内務省許可（非賣品）

明治三十四年十一月廿一日印刷

明治三十四年十一月廿三日發行

編輯兼發行人 木川雅太郎

滋賀縣犬上郡彦根町大字中組東
第二十三番屋敷

印 刷 人 安田 豊 八

岐阜市簗土居町四十五番戸

印 刷 所 安田印刷工場

岐阜市簗土居町四十四番戸

發 行 所 滋賀縣立第一中學校崇廣會